

ソフィ・カル《眠る人々》における写真とテキストの考察

松田愛 (富山大学)

ソフィ・カル (1953-) の《眠る人々》(1979) は、24 時間自分のベッドが人々に占有され、ふさがっているところを想像したカルが、1979 年 4 月 1 日から 4 月 9 日まで、友人や知人、そして偶然出会った人々に、自分のベッドに 8 時間ずつ交代で眠りに来てもらい、その様子を写真と言葉で記録した作品である。本作品は、1980 年の第 11 回パリ・ビエンナーレで展示され、カルにとってのデビュー作となる。展示では、ベッドでの人々の様子を撮影した 176 枚の写真と、23 点の説明テキストが壁面に並べられる。そして、壁面の展示と向かい合う形で机と椅子が設置され、質疑応答を含むカルと人々との会話が記録されたテキストが置かれる。

本作を《大いなる眠り》と呼ぶジャン・ボードリヤール (1983) は、同時期に制作されたカル作品《ヴェネツィア組曲》(1980) における他者の尾行と、本作において眠りを他者に委託することを、ともに人生からの救出として読み解く。村山康男 (2002) は、ボードリヤールによるカル論をふまえて、《眠る人々》やカルの他の作品に顕著に見られる、戦略としての「他者への依存」について論じている。また、セシル・カマル (2003) は、「芸術家像の起源」という観点から、パリでの人々の尾行など、カルの初期の仕事やレトリックやアンテルナショナル・シチュアショニストの実践と比較して論じている。特に、カマルは、《眠る人々》の発表時における作家のステートメントやその後の作品タイトルの変遷、当時の批評、そして参加した人々への質疑応答の内容に着目しながら、本作に芸術家像構築の重要な契機を見出している。

しかしながら、本作品の写真に見られるイメージやテキストの具体的な内容については、これらの先行研究では部分的な考察はなされていても、全体として十分な検討が行われてきたとは言い難い。

そこで、本発表では、これらの先行研究を検討しつつ、2000 年にフランスのアクト・シュッド社から出版された本作品の書籍版を主な対象として、写真とテキストの分析を行う。特に、カマルも着目していた発表当時のステートメントやタイトルに含まれるカルという言葉「儀式という形をとった恣意的な状況の誘発」は、書籍版にも引き継がれており、本作を読み解く重要な手がかりとなっている。実際、本作品には、人々が眠っているところだけではなく、眠る前後の人々とカルとの会話や、互いに見知らぬ者同士がベッド脇ですれ違う出会い (あるいは出会い損ない) の様子が記録されている。1978 年から 79 年にかけて、カルはパリの人々の尾行、すなわち他者に導かれる移動 (déplacement) を通じて、都市を発見しようと試みた。本作では、他人のベッドで眠るというもう一つの「移動」により、シーツの暖かさや気配などの見えない痕跡を通じて、すれ違う参加者同士が、ほんの束の間交差する状況をつくり出した。